

生活科

石田 浩子・山田 慎

1 生活科の基本的な考え方

生活科は、子供たちが具体的な体験や活動を通して、身近な人・物・自然との関わりを深め、自分の思いや願いを実現していくことを大切にする教科である。その中心にあるのが「遊び」である。遊びは、子供にとって単なる余暇活動ではなく、学びの原点であり、生活科の授業を形づくる核である。

ピーター・グレイ（2018）は、遊びの中で子供が自ら関わり、創造性や協同性を育むことを学びの本質として位置づけている。また、自由な遊びこそが子供を自立した学び手に育てる土台であると述べている。生活科における遊びもまた、子供が工夫したり試したりしながら「もっと〇〇したい」という願いを抱き、仲間と共に取り組む中で共感や発見の喜びを味わう活動である。こうした遊びを基盤とした学びの積み重ねは、自ら学ぼうとする意欲を育み、学びの基盤を形成するものである。

さらに、生活科の授業づくりにおいては、子供の「遊び」の特性を大切にすることが重要である。遊びは、子供が自発的に始め、目的やルールを柔軟に変化させながら続ける活動であり、試行錯誤や工夫、仲間との協働を通して発展していく。そのため、授業づくりにおいては、遊びを通して課題を発見し解決へとつなげる学習活動の構成、「大きな繰り返し（長期的な遊び・活動）」と「小さな繰り返し（遊びの中での課題解決）」を取り入れた展開、遊びが自然に深まるような活動形態・場所・時間・道具の工夫、子供の発見や気づきに教師が丁寧に応答し価値付けする環境構成、友達との関わりや思いの交流が自然に生まれるような仕組み、さらには異学年や保護者、地域との交流を「遊び」の形で取り入れる実践などが求められる。こうした姿は、自立と協働を基盤とし、多様性を理解し共に生きる力につながっていく。

今年度の研究主題「共に生きることを学ぶ教科等の授業づくり」を踏まえると、生活科は、子供が遊びを通して他者と関わり、共に学ぶことの中で自らの思いや願いを見つめ直し、自己と他者の尊重を実感できる貴重な場である。この思いや願いに寄り添いながら、仲間と共に遊びや活動を追求することで、共生社会に生きる力を育む授業づくりをめざす。

生活科でめざす子供の姿	生活科の授業づくりの特徴
・ 「もっと〇〇したい」というこだわりを持ち続け、自ら学びに向かう子供	・ 「大きな繰り返し（長期的な遊び・活動）」と「小さな繰り返し（遊びの中での課題解決）」を取り入れた展開 ・ 遊びが自然に深まるような活動形態、場所、時間、道具の工夫

2 研究の目的

本研究では、生活科における「遊びを通して関わり合いながら学ぶ」授業づくりをテーマに、小学校1年生を対象とした単元「あきの たからで あそび みつけ！」の実践を通して、以下の2点を明らかにすることを目的とする。

- (1)「主体的に課題を発見し解決しようとする意欲を育むには、授業の導入部分での遊びとの出会いをどう構成するか」を明らかにする
- (2)「遊びの中で、どのような過程で子供が目的やイメージを共有するのか」を明らかにする

3 研究の方法

第1学年において「身近な自然を利用したり，身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動」を中心とした単元を開発し，「あきの たからで あそび みっけ！」の学習を展開する際に，次の視点を重視する。

- 単元開発においては，次のことを行う。
 - ・ 子供の遊びを軸として，柔軟に内容や時間を運用できるような形で単元計画を示す。
 - ・ 単元計画内に，遊びに関する環境（ものや空間，人，時間など）の情報を示す。
- 学習の展開にあたっては，次のようにする。
 - ・ 対象や仲間と繰り返し関わる場，気付きを交流する場を設定する。
 - ・ 子供の発見や気付きが広がり関連が生まれるように，発見や気付きのよさや重要性を価値付ける。

さらに，児童の姿や語り，ワークシート等を通して，どのような気付きや変容が見られたかを分析し，子供の学びの深まりとその背景にある教師の支援のあり方を検討する。

【引用・参考文献】

朝倉淳編（2018）『平成29年改訂 小学校教育課程実践講座 生活』，ぎょうせい。

朝倉淳・永田忠道共編著（2019）『新しい生活科教育の創造－体験を通した資質・能力の育成－』，学術図書出版社。

田村学（2019）『深い学び』，東洋館出版社。

広島大学附属東雲小学校（2023）『令和四年度教育研究初等教育』

広島大学附属東雲小学校（2024）『令和五年度教育研究初等教育』

文部科学省（2018）『小学校学習指導要領解説 生活編』，東洋館出版社。

ピーター・グレイ（2018）『遊びが学びに欠かせないわけ』，築地書館。